

将来に向けての学会活動のあり方 ―ひとつの提案―



藤野陽三
論説委員
横浜国立大学 特任教授
創立 100 周年事業実行委員会委員長

土木学会は今年、100周年を迎えます。すでに多くの行事が行われ、11月21日の記念式典、祝賀会ほか様々な行事が各地で予定されています。私は様々な記念事業に深く関与する中で、学会本部や支部の活動の状況を知る機会があり、この中で、学会活動のあり方について自分なりに考えてきましたので、ここではそれを述べたいと思います。

学会の活動レベルを示す一つの尺度として会員数があります。個人、学生、法人会員等を合わせた会員総数の変化を図1に示します。1914年に443名ではじまった土木学会も次第に会員総数を増やし、第二次世界大戦中には15,000を、団塊の世代が入会しはじめた1970年代前後には3万を超えています。2つのピークのあと、会員数がストンと落ちているのは、会費未納の方を整理したからだと思います。バブル経済は1992年前後に弾けましたが、その後、日米構造協議の影響で様々なインフラプロジェクトが実施された中で2000年には4万を超えています。その後、2010年にはほぼ35,000にまで下がりましたが、再び、上向きになり、会員増強活動のおかげで現在は39,000近くになっています。電子情報通信学会、日本機械学会や日本建築学会などの大学会は減少傾向にあり、今や会員総数では逆転し、土木学会は自動車技術会に次ぐ工学系の学会になっています。会員総数が4万人を超えることになれば、大変嬉しく思います。

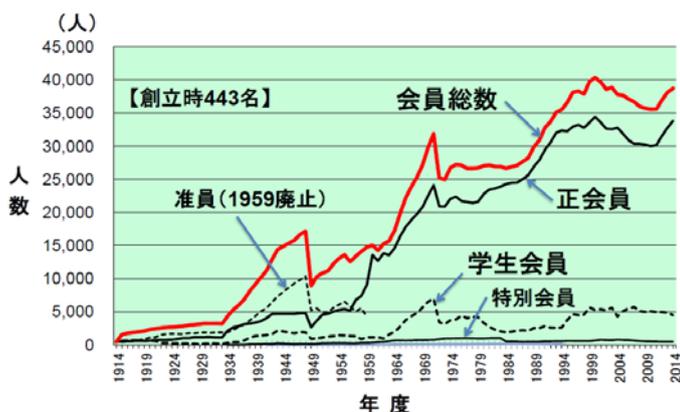


図1 この100年の会員数の推移
(会員数データは各年度末、2014年度は6月末)

私は学の世界で生きてきましたので、土木学会は委員会活動、年次学術講演会、シンポジウム、論文集などを通じて、研究活動を発表し、他の会員の研究活動を知る、学ぶ場でした。土木学会での活動がなければ現在の自分はありません、大変な恩恵を感じています。今は私にとり学会のためにボランティア的に動くことは苦痛でも何でもなく、恩返しだと思っ

ています。今から思えば、多くの方とのつながりが出来たということが学会の最大のメリットでした。

私のような、「学」に属する個人会員は4千人余りで、全体の約1割強に過ぎません。20年前には学の比率がほぼ20%でしたから、この20年で大きく減っています。会員の中で論文集やシンポジウム、年次学術講演会などに関係しているのはごく一部で、多くの会員は学会との接点は学会誌のみというのが状況だと思います。そういう方にとって土木学会はどういう意味があるのでしょうか？

本年2014年の学会誌1月号に100周年関連記事として「学会とは何か？」という小文を書きました²⁾。「学会」というのは1878年ごろ日本で作られた造語で、中国や台湾に伝わり、外来語として使われています。英語ではJapan Society of Civil Engineersとあるように土木技術者のSocietyという意味です。もともと土木学会は工部大学校の卒業生が中心の同窓会のようなものでしたが、当時は西洋から学び、取り入れることが命題で、「学会」という名称になったのです。土木学会というのはそもそも土木を共通とした同志、仲間の集まり、同好会なのです。「学会」という用語に引きずられ、我々は少し「学」にこだわりすぎているように思います。

アメリカ土木学会の会長は支部ローテーションの中で、結果的にはコンサルタントエンジニアが、イギリス土木学会は学と民の方が交互に就いています。土木学会会長はいろいろな分野の方から選ばれるようになってきているのは見識ですが、学会活動はかなり学に偏っているように思います。土木学会には調査研究委員会が非常にたくさんあり、年次学術講演会もほとんどが研究発表の場になっています。それも東京が中心です。実務に携わっている会員が関心を持つ集まりは驚くほど少ないのではないのでしょうか？

私は、ごく普通の会員が集まり、お互いに啓発できる、集いの場をたくさん、各地に作る必要があると考えています。電子媒体によるバーチャルな集まりもありますが、フェイスブックフェイスの集まりにも高い意味があると思っています。アクセスという面からは、支部や小さい分会等の単位で会員の集いの場を作っていくのがよいでしょう。そういう意味で、支部活動がより重要になります³⁾。会員が所属する組織を離れ、一個人としてフラットな集いに参加し、啓発され、成長し、人と人のネットワークが形成され、学会員であることのメリットを感じる、これが私の学会のイメージです。

土木学会の職員の数多くなく、学会の方にサポートはいただくとともに、会員によるボランティア活動が不可欠です。そのような活動を行うことの、目に見えないメリット、満足感も大きいと私は思いますが、皆様どうでしょうか？

- 1) 土木学会編：『土木学会の80年』p.81, 1994.11
- 2) 藤野陽三：学会とは何か 土木学会誌, 2014年1月号, p.3
- 3) 土木学会将来ビジョン策定特別委員会: 社会と土木の100年ビジョン 中間案, 2014年.